

山水と風景のあいだ※

—韓国開港開化期の見聞録における間文化的自己表象—

黄 鎬徳（成均館大学校）

1. 山水と風景
2. 開化、速度の思想
 - 2.1. 汽車経験の系列
 - 2.2. 速度の経験、山水の解体
3. 眺望、高さの思想
 - 3.1. 視線と支配
 - 3.2. ある儒者のめまい
4. 感覚と理念

※この論文は 国際日本文化研究センターにおける2006年の共同研究報告国際シンポジウム〈前近代における東アジア三国の文化交流と表象〉（代表者：崔博光）で初稿が日本語と韓国語で発表された後、「他者への航海、「間」で創案されたネーション—開港期の見聞録と間文化的自己表象—」というタイトルで学術誌『韓国思想と文化』第34集（韓国思想文化学会、2006.9.30）に韓国語原稿として掲載された。修正・加筆した原稿の日本語訳の際、国際日本文化研究センターに御支援を賜った。

<論文要旨>

本論文では、金綺秀、李憲永、朴泳孝、朴戴陽、李台植などによる開化期の日本見聞録を対象に、近代的風景と視線の問題について検討を行う。その具体的な立論の方法として、通信使文学および開港以降の日本見聞における修辞学的体系、風景観を比較する。描写されている風景は、ものごとのあるがままの模写である前に、修辞学的レベルまたはひとつの様式的レベルを有する。朝鮮通信使と関連した一連の見聞録は、日本に対する理解を支配する種族誌的な機能を遂行しており、相互参照の中でひとつの系列体を成す様式を作り出した。先行記録に対する読書を通じて行われる見聞は、風景の「自覚」である前に知的な先験的原理によって支配されている。こうした参照体系を通じて通信使らは他者の中にある不安を払拭する一方で、見聞とその見聞に対する判断が調和した優麗で安定した自己表象の修辞体系を創り

出している。その結果のひとつがチョ・オム（趙曠）によって編集された『海行摠載』であると言えよう。

例えば、これらの一連の通信使関連記録は、多くの場合に風俗と風景を区別する方法を通じて文化的自尊に到達する叙事を示している。「財物の貿易を通じて宝を蓄え／利益を睨み一錢を争う」（遷財儲寶貝、射利意錙銖、南龍翼）といった表現や、「雄大なる琵琶湖の姿／源なしに自然に湧き出て／三百里の広さに水をたたえ／深さと遠さまさに海の如しである／...／楼閣は壯麗で／比類ない眺めである／倭人に与えるには惜しい所だ」（金仁謙）のような表現などがそれである。文化産物の繁栄を利への欲求として規定しながらも、その反対側に道と文を据える方法を通じて、近世日本の具体的な生活様式は、度々非禮や淫風、賤品なものとして見なされた。

しかし、明治維新以降の日本の風景は通信使文学の種族誌的な表象を決定的に破壊する。1876年以降の日本紀行は、もはや風景と風俗を分離させた優麗な修辭学的体系を受け継ぐものではなかった。叙事の安定性を築いた山水の美しさと風俗の小品さ、その両者を媒介する性理学的思考そのものが臨界点に達していたのである。「風景加畫」のクリシェにおいて書画は山水画ではなく、洋画になっていた。（加對洋畫一幅、朴泳孝）

近代的風景の問題と関連して何よりも重要なことは、こうした修辭学的配置を生んだ山水画的視線、景概と身体との結ぶ規律が破壊されていたということである。新文明の報告に変化した近代形成期の日本見聞において、彼らは新たな視線の装置を目の当たりにした。例えば、パノラマ的空間もそのひとつである。汽車の速度に圧倒された視線は、固定することのできない視線と対象との問題に直面した。時間意識—速度は「遅い」という感覚を通じて「歴史の進行」を問題視し、移動—権力としての近代文明を認識することになる。速度と身体との不一致は絶望感を生んだ。第二に、衣装の問題がある。華と夷いう二項対立的な図式において近世日本の衣服文物は蠻風であった。しかし万国が行き交う近代という時代において朝鮮の頭髪や服装はもはや文化の象徴ではあり得なかった。対照可能な複数の対象からなる外交街の制度文物は深い孤立感をもたらした。第三に、凝雲閣に代弁される「眺望」の位置—視線の権力は、「遅れて孤立した「ひとりの朝鮮人」に「めまい」として経験されることになる。

開港以降の日本紀行に表れる速度の中の視線、眺望、写真、パノラマなどの問題系を通じて近代的視線の創案過程と、それらに対する朝鮮の儒者や官吏たちの対応について検討を行った。近代的風景の中で身体が経験する激動や新たな視覚装置は、経験の表象のみならず、思考全般にも影響を及ぼした。日本の近代風景、近代的視覚装置の中に置かれた身体的感覚。これらは物質的環境そのものに対する情緒的「感覚」の領域を通過し、自己表象の危機に達していた。環境の物質的形態がもたらす視線の変動と思想的な揺れがそれである。こうした揺れは、山水を儒学の観点

から表象 (representation) することができないまま、近代の風景をそれに適合させた近代的視線の装置を通じて「提示 (presentation)」せざるを得なかったのである。美しさと尊厳は消え去り、恐怖に繋がる崇高と孤立感、めまいが日本紀行の美学となり始めたのである。

キーワード：風景、風俗、山水、汽車、眺望、衣装、表象と提示、視線の権力、絶望感、孤立感、めまい、相互参照の体系、種族誌、性理学、近代性、身体現象学、美しさ、崇高、判断、恐怖、儒者

1. 山水と風景—海行摺裁流の語用論と修辞学

1876年の朝日修好條規（江華島条約）以降、度重なる日本使行において作成された各種復命や見聞、漫録の類は我々の知る近代文明概念の出発点であり、それ自体が近代経験への案内者であったと言える。何故ならば、西欧文明—資本主義の到来は何よりも生活の具体的なレベル、即ち、直接目で眺め、触り、聞く行為、加えてそれらを価値化し、叙述する表象的レベルにおいて最も明確に認知され、拡散されて行ったからである。

産業資本主義が帝国主義と運命的に出会い、転化されて行った時点である19世紀末の朝鮮の知識人たちは、近代文明と西洋の浸潤をどのように見たのか。何を経験し、また記録したのか。その記録の方式、即ち修辞学と価値化はどのような形で落ち着いたのか。以上のような連鎖的質問を投げかけ、また推し進めようとする場合、我々がまず先に、最も具体的に対置するテキストがまさに開明・開港期の日本見聞録なのである。

彼らは「差異」を目撃した。しかし周知の通り、その差異は過去の日本紀行文である海行録が表現してきた「違い」とは実に異なるものであった。物化の繁盛と風景の美しさ・壮快感に感嘆しながらも、礼儀と品格の観点からそれらの風俗を叱咤する均衡を確保する夷荻化のナラティブ¹はほとんど不可能になっていた。物化の繁盛を「利への貪欲」として描き、風景の美しさとそれを描写する詩事に力を注ぐ態度、他方で、最終的にはその風景すらも日本の気質に照らして身に余るものであると評価するような表象方式は危機に逢着することになる。例えば、近代以前の海

¹ たとえば、通信使の随員たちはよく種族誌的修辞を通して、当時の日本が見せてくれた物化の繁盛と風景の大きさを超えたりした。「男女間無別、淫風大熾」（南龍翼『扶桑録』「別録」1655年使行）、「喜怒不節、未嘗含蓄」（南龍翼『扶桑録』「別録」1655年使行）海行録類を取り扱った大体の文章が「山水景概」に対する賛嘆と風俗に対する軽蔑の間の亀裂について述べている。特に、物化の繁盛に対する関心に注目した場合として、李慧淳「17世紀通信使集団の文学と意識世界—南龍翼『壮遊』を中心に」『韓国漢文学研究』第17集、韓国漢文学会、1994、103～110頁。）

行録ではこうした描写がよく見られた。「財物を貿易して宝を蓄え／利益を欲し一錢を争う」（遷財儲寶貝、射利意錙銖、南龍翼）という表現や「雄大なる琵琶湖の姿／源なしに自然に湧き出て／三百里の広さに水をたたえ／深さと遠さまさに海の如しである／…／楼閣は壯麗で／比類ない眺めである／倭人に与えるには惜しい所だ」（金仁謙）²。こうした風俗と風景の分離、自然と人間との分離によって日本を表象する方式こそが、上述のような修辞を生んできたのである。要は多くの朝鮮通信使記録には、人間が存在する「風俗」と自然の産物である「風景」との分離に依存する種族誌的な修辞学が作用していたことになる。

しかし、そうした観点の維持を可能にした儒学的な教養自体が克服されるべき旧時代の産物として認知される場所において、朝鮮の知識人たちはうろたえずにはいられなかった。文廟の中の「図書館」には「漢文と和文、洋文の入り混じった奇異な」書架³が広がっており、儒学の經典は品揃えのために陳列された凋落した古い学問に過ぎなかった⁴。所謂「我道」は相対化され、図書館の片隅に追いやられていた。勿論、そこでむしろ春秋大義を保存する朝鮮を推し出すこともできたであろうが⁵、山水や景概への逃避、即ち文学的表象の安定性によって人間産物（の近代的な転換）に関する経験を揉み消すことはできなかった。何故ならば、彼らの感覚的体験は専ら新たな文明の産物に圧倒されたものであり、彼らとしては「見たこともない対象」を対象化し、表象しなければならなかったためである⁶。

更に、過去の日本紀行が通信使の残した広範囲な海行録⁷に頼った相互参照の体

² 金仁謙、『日東壮遊歌』、高島淑郎 訳注、平凡社、1999、254頁。原文はハングルで書かれた紀行歌辞。

³ 李櫛永 『日榎集略』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、83頁。李 櫛 永 の「櫛」は、元々「金+憲」であるが、ワードプロセッサ上、入力ができないため「櫛」で表記する。以下、同一。

⁴ 「図書館」になった文廟に対する疑問、漢学の位置づけに対する疑問と答弁については李櫛永「日榎集略」『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、216頁を参考。

⁵ 「孔夫子墓を拝謁に行った。戸外に碑を立て、「東京図書館入門」と書いておいた。…左右には顔子・曾子、子思、孟子などの四位の金像があったが、全部埃だらけで嘗て水をかけて掃除した跡がなかった。この国でもかつて孔孟の学問を崇め、像を奉安し、尊んで經典を講習したが、開化以後、經史をすべて廃止して隣の狭室に片付け、正堂左右の書架にあるのはすべて西洋の書籍のみである。…しかし、魯国には春秋大義がある。孔子が道を広げるためにいかに乗って海道で行こうしたのは箕子朝鮮なのである」朴戴陽『東榎漫録』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、438頁。（原文は漢文）

⁶ 筆者はこの問題を金綺秀、金弘集、朴泳孝、朴戴陽の該当見聞記を通して論証したことがある。黄鎬徳『近代ネイションとその表象』ソミョン出版、2005、黄鎬徳「朝鮮儒者が見た1884年の東京、朴戴陽の場合—徳化と譎化、表象の近代をめぐって」『比較文学比較文化論集』第22号、東京大学比較文学比較文化研究会、2005.3。

⁷ 『海行摠載』類が日本使行に及ぼした影響、すなわち海行録間の相互参照的性格については河宇鳳「新たに発見された日本使行録等—『海行摠載』の補充と関連して」『歴史学報』第112号、歴史学会、1986年、76～80頁。（韓国学者の漢字氏名は確認可能な限り漢字で表記した）河宇鳳は『海行摠載』が洪啓禧によって初めて収集、編纂、命名された一連の日本使行録だという点で『海行摠載』という名称を公式使行関連記録に限定すべきだと見ている。日本紀行文全体は当然「燕行録」と対比して「海行録」と呼ぶべきだということである。彼によると通信使として派遣された官吏は先行記録をあまねく読んで参照

系であったならば、新たな文明事務と関連した開港以降の記録は、表象の問題において少なからぬ困難に直面することになる。文明の地から夷狄の地に向かうという通念の中で作成された、いわゆる海行摠載流のような通信使関連の記録は、それ自体がひとつの系列体を成しながらも、前近代の朝鮮社会においては一種の種族誌 (ethnography) 的な機能を遂行していた側面がある。18世紀に編集され、今日までその名を伝える『海行摠載』がその典型的な事例であろう。しかし開港以降の日本を横断するに当たって表象 (representation) の安定性を保障していた過去の種族誌は殆ど無用のものと化していた。風景とは書誌的な知識と先験的原理の影響を受けながら、そうした知識や先験と体験との微妙な差を区別し、認めて行くプロセスによって表象可能になる。逆に完全に異質的な風景の場合、意識はものごとの豊富な特徴に圧倒され、その意味のある特徴をどのように選別すれば良いのかもわからなくなってしまう。表象の体系はその瞬間、ある限界点に到達することになる⁸。

明治維新以降の日本の風景は、通信使文学の種族誌的な表象を決定的に破壊した。1876年以降の日本紀行は、もはや風景と風俗を分離した優麗な修辭学的体系に基づくものではなかった。ナラティブの安定性をもたらした山水の美しさと風俗の小品さ、その両者を媒介する性理学的思考自体が臨界点に達していた。「風景加畫」のクリシェにおける「畫」は、山水画ではなく洋画であった。(加對洋畫一幅、朴泳孝)。新文明においては、それに合致した完全に異なる「画風」が必要とされていたのである⁹。

これは一次的には日本を経由した西欧文明—「他者表象の困難さ」でもあったが、何よりも儒学者としての、または自らが属する「文明」そのものに対する深刻な動揺を伴った「自己表象の危機」でもあった。端的に彼らは日本の近代風景を前に、理念と現実の相克を経験したのであり、そのことを先ずは如何なる形でも提示 (presentation) しなければならなかった。「表象」が自らの属する文化理念の中で、ある事物を「再び (re)」見せる再現・代表・舞台化の行為 (representation) であるとするならば、「提示」とは、先験的に与えられた感覚、後天的に学んできた理念または文明の意識を圧倒する恐怖の対象およびその経験的現実をありのままに露わにする行為であると言える。表象がよく美しさとの関連の中で比較的安定した方式の修辭学を運用するのに対し、提示は崇高の体験—即ち合目的に理念化することのできない対象に対する体験そのものを叙述する。そのゆえ、対象は当惑・驚き・激しい懷疑や葛藤を表わす修辭とともに「提示」される。ある現象が感

し、従って記録の間では相当な一致点が生じるしかなかった。

⁸ Augustin Berque、オギュスタン・バルク『日本の風景、西欧の風景』篠田勝英訳、講談社現代新書、1990、40～41頁。

⁹ 金綺秀は明治日本の表象界の変化、新たな表象の方式について次のように記している。「最近はまだ西洋の画法を工習し、巧みさがこの上ないので、実に実物とすべてが同じであり、技法が精巧でないものはなかった」金綺秀『日東記遊』『海行摠載10』民族文化推進委員会、1977年、203頁。(原文は漢文)

覚と信念との連結を停止させ、既存の表象体系を超越して知覚される時、その現象は崇高の経験、提示の方法を通じてその姿を現すことになるのである¹⁰。

表象と提示の間を行き交う近代文明への叙述。本論文では、このような問題を金綺秀の『日東記遊』（1876）、李櫛永の『日槎集略』（1881）、朴泳孝の『使和記略』（1882）を、朴戴陽の『東槎漫録』（1884）、李台植の『紀行歌辞』『日本遊覧歌』¹¹（別称、『遊日録』、1895/1902年執筆）を中心に検討していくことにする。

この時期の見聞に対する文学的研究が不足しているのにはいくつかの理由がある。まずは、開港以降の時期に作成された作品であることから、古典詩歌（または古典文学）研究からは比較的疎外されていた感が否めない。ジャンルと歴史を関連付けて理解する方式においては、最も時代と密接に関連している先端的ジャンル—例えば新詩や新小説のようなジャンルを研究の中心として採択せざるを得ないためである。第二に、最近の間文化的語用論や文明間の接触に対する旅行記の研究が理論的には活発であるにも拘らず、西欧における他者の研究に比べて、非西欧において作成された旅行記に対する研究は、そうした動きとは多少の距離のある歴史的な研究（近代化論）の形に縛られていた感がある。植民主義に対する批判と連動した旅行記研究の中心は「西欧が東洋を見る方式」であった。したがって、「非西欧」が見る非西欧、または「西欧の経由地点」（日本）に対する「非西欧」の反応は「理論的」には扱い難い対象として認識されてきた。これらの見聞録を啓蒙または開化の過程として説明する場合は、植民主義と文明化の連続的関係を肯定することに繋がりやすく、旧教養の「適応」過程や変換として把握しようとする場合においては、「事実」を確認する歴史研究から大きく逸脱することはなかった。

本論文は、こうした問題意識の中で、これらの作品を「間文化的な自己表象」という、より包括的な領域として扱うことにする。イデオロギーは、それが完全に無用のものとなるか、あるいは偽りのものとなる最後の瞬間までは、その安定性を維持する傾向がある。しかし身体的自覚や感覚的現象と関係する表象の枠は、そうした安定性の破壊を何よりも先に経験することになるのである。表象の規則は自らが

¹⁰ 「提示」の概念についてはJean-Luc Nancy, *A Finite Thinking*, tran. Jeffery Libbrett, edit by Simon Sparks, Stanford Univ. Press, 2003, p. 225を参考。

¹¹ 特に旧様式でありながら感覚的経験により近いといえる紀行歌詞を通して日本経験と所感を披瀝した李台植の文章は当時、珍しくハングルで書かれた外国体験記録であるのみならず、金仁謙の『日東壯遊歌』とともに、朝鮮時代にたった二つしか存在しない日本紀行ハングル歌詞でもある。この歌詞はかつて1975年崔庚賢によって『文学思想』に紹介されたにもかかわらず、著作の重要性や内容の豊富さに比べて比較的研究が幅広く成されてこなかった。李台植著、崔庚賢解題「日本遊覧歌」『文学思想』1975年11月号。影印解題本として崔庚賢『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソン出版社、1999。基本資料としてこの本を参考とした。発見経緯、異本、周辺記録について崔庚賢『韓国文学の考証的研究』高麗大学校民族文化研究所、1996。その他、日本体験と日本観に注目した研究として、ソンジェヨン「『大日本遊覧歌』に表れた日本と日本観」『東洋学』vol.33。檀国大学校東洋学研究所、2003など。

理念を反復することができない時には、対象をそれ自体として「提示」し、それによって自らが属する信念の体系に対する再認識を行うためである。

アイデンティティは反復を通じて形成される。反面、疎外（alienation）は自らが自らに対して外部者として感じる感情と関係している。イデオロギーであれ、個人的な信念であれ、それらがある対象の中で繰り返し反復され難い状況に陥った時、個人は自らと自らの属する社会に違和感を覚え、自己を反復—即ち再現＝表象することに深刻な危機を経験することになるのである。他者に対する経験の過程を通じてはじめて「自己表象」の問題も登場するのである。目で見て耳で聞いたこと（見聞）—感覚的な世界の中で波乱を起こす対象は自己を確認し、評価の審級に到達するためにも、表象と提示の狭間を行き交うことになるのである。

文明（civilization）というものの自体を既存の夷狄と覇道の修辞で掌握することができなくすれば、それをどのように把握し、どのように書くべきか。その瞬間、文明間の「差異」は思考と表象の問題において重要な節目を残すことになる。その「差異」を文明化、すなわち、開化のプロセスを通じて占有するのか、または既存の文化記憶の中に混在させるのか、或いは徹底かつ完全な他者として打ちのめすのか。こうした問いの前後に存在するのが、いわゆる「書くこと」＝表象／提示の問題なのである。この問いに対する解明の方法として本論文では、いわゆるパノラマ・眺望・動きの中の視点のような「視線」の問題を重要な分析の枠組みとして取り上げる。また、こうした感覚的で身体的な混乱を收拾するプロセスにおいては、どのような知覚の変換が行われるのか、そうした知覚の変換は思考体系の変化にはどのような影響を及ぼすのかについても論証して行くことにする。これらをより具体的な「差異」の中に露わにするための比較の方法として、本論文では開化期の見聞録の間の幅広い対照を行うことにする。議論の効率化のために、経験の様相の中でも、新文物と関連した幾つかの相関物に対する反応とその表象／提示の方式に集中したい。

2. 開化、速度の思想

2.1. 汽車経験の系列—金綺秀、李櫛永、朴泳孝、李台植の場合

開港以降の日本訪問において最も大きな感覚的衝撃をもたらしたのが、火輪、即ち蒸気機関であった¹²。特に汽船と汽車に代表される強力な力と速度の発生装置、

¹² 朝鮮の知識人が蒸気機関についてまったく無知だったわけではない。たとえば、中国の『解国図志』（1852）を通して「火輪船」という単語に接した金綺秀は日本使行中、その運行原理を準用した「蒸気船」という言葉に接し、1881年紳士遊覧団の一人だった李櫛永と1882年修信使だった朴泳孝は「瀛船／汽船」だとこれを命名している。このような語彙の移動（火輪船→蒸気船→汽船）こそ、開化の様相と知識の進歩をあらわす現象であろう。新文明語・新造語の流入と理解については黄鎬徳『近代ネイションとその表象』ソミョン出版、2005、4章6節。

それらが誇示する大量の運送能力と速度そのものは驚異の対象でもあった。実際に1854年、二度目に日本を訪れたペリー提督が幕府将軍に西欧世界の象徴として見せた贈り物が、実物の1/4の大きさの列車の模型であったという¹³。

恐らくは、実際の経験においても人生初であったはずの蒸気船の乗船や汽車への搭乗のような経験を表象する儒者または官吏の言語は同様ではなかった。彼らは同じものを見て、経験してはいるが、異なる書き方をしたり、或いはまったく書かなかったりしている。何故なのか。先ずは金綺秀（1876）から李台植（1895）に至る20年近い時間の経験と表象の幅について検討する必要がある。彼らは、いわゆる「火輪車」の経験について、それぞれ以下のように記している。

両側は全てガラスで塞いであるが、装飾が豪華絢爛で眩しいほどであった。車両ごとに全て車輪があり、前の火輪が一度回ると、その他の車輪も一斉に回り、雷の如く走り、風や雨の如く躍動した。一時間に3、4百里を走ると言うが、車体は

安穩で全く揺れることがない。ただ、左右に山川や草木、家屋、人物が見えたりはするが、前に表れたかと思えば、次の瞬間にはもう後ろに見えたりして、何が何なのか到底わからなくなってしまう。煙草一本を吸う間にもう新橋に到着したところを見ると、何と九十里を移動したことになる¹⁴（1876）。

未の初刻（午後1時頃）に火輪車に乗り、吸田・茨木などを通過した。山々が秀麗で、野は広く平らで、所々に山里が密集して連なっているが、穂麦がちょうど黄色く染まり始めた頃で、稲は青々しく、季節にはこの土地やあの国などといった区別などないことを示していた。未の刻の終わり（午後3時頃）に西京（京都）駅に着いた¹⁵（1881）。

晴れ。辰の刻丁度に汽車に乗って神戸から大津に向かったが、引き返して西京を過ぎた。戌の刻丁度に駅に出て汽車に乗り東京に向かい、わずか1時間で青松寺に着いて休んだ¹⁶（1882）。

一行の人たちとこの次は一緒に大阪に行って遊覧することにした。腕車（人力車：訳者）に乗って駅処所に到着したのだが、これは即ち汽車の駅のことである。輪車がここで止まれば、通行人が降りたり乗ったりする。

¹³ 老川慶喜『鉄道』東京堂出版、1996年、5～7頁。

¹⁴ 金綺秀『日東記遊』『海行摺載10』民族文化推進委員会、1977年、63頁。

¹⁵ 李懋永『日槎集略』『海行摺載11』民族文化推進委員会、1977年、75頁。

¹⁶ 朴泳孝『使和記略』『海行摺載11』民族文化推進委員会、1977年、332～333頁。（原文：92頁）

10里または20里ごとに必ず停車するところがあるが、停車所にはそれぞれ男女や上中下の待合室がある。…切符は紙で作られており、座席の等級やどこからどこまでという行き先の文字が印刷されていた。…10時丁度に汽車に乗った。汽車の構造は、火筒が前にあり、客室は真ん中に、貨物車は後ろにあった。大きなものでは客車が十数両もあり、貨物車が10両余りにもなる。互いに牽制する格好だが、その機関を操縦すれば蒸気が立ち、煙が上がる。前のものが走れば、後ろのものが引っ張られていく。緩行も急行も可能であるが、それは機関の作用次第である。従ってまた、緩行車や急行車という名が付いている。鉄道で大阪に着いたので、百里の遠い道をわずか1時間で来たことになる。途中の山河風物は所々で見過ぎてはきたが、ここに来て初めて原野が広く開けて田地が平らであるのを見た¹⁷。(1884)

一気に引っ張られ／矢の如く逃げて行くので／左右に見えるものが／眼目を眩荒とさせる。／大ざっぱに過ぎて行く／ありとあらゆるものがあること／数三十里の竹森に／竹も鬱蒼として、／大原に蓮を植えて／その蓮が満開であること、／層巖絶壁に囲まれ／その高さは百尺にも達し、／飛流直下の三千尺は滝も荘厳である。／一望無際広い平原に／穀物が実り／農夫が一緒に集まって／草取りをする姿や／進むにつれて所々／一番の荘観は何であろう？／十里長江の橋を渡した／その上を過ぎ／十里の山を打ち抜いた／その中を過ぎれば／一瞬にして漆黒の夜となり／火を灯して走る／そうした在り方が／奇異なほどに巧みで、／物力の所要もさることながら／技も驚きである／申の時刻に西京に着いて／車を降りると／千里を来たというのに／5、6時間しか経っていない¹⁸(1895/1902)。

時には長く煩多に、時には淡々と簡略に述べられている上記のような叙述方式について、我々は4つ程度の観点から区別して解釈することができよう。

先ず、最も先に考慮すべき点は、相異なる創作の動機に基づく叙述上の差である。創作の動機によって汽車のような新文明に対する接近態度や経験の表象に関する態度がそれぞれ異なっている。先ずは、各記録の叙述目的或いは動機について簡単に検討すると以下の通りである。

李台植の朝鮮語歌辞である『大日本遊覧歌』を除くその他の記録は、使行中の見聞と感想、その他の業務と関連したより公的な内容を漢文で記したもので、公式な

¹⁷ 朴戴陽『東槎漫録』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、419頁。

¹⁸ 李台植著、崔庚賢訳注「大日本遊覧歌」『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソソ出版社、1999年、40頁。漢字表記は崔庚賢の解題による結果であり、原文はすべてハンダールである。引用は現代語表記に変えた。

政府記録ではないにしても公務的性格が明らかな記録であると言える。特に、朴泳孝の『使和記略』と李櫨永の『日槎集略』は、それぞれ壬午軍乱の賠償金問題と租税及び関税事務の視察報告書の一部として書かれたもので、その目的が限定的であり記述も簡潔である。反面、李台植の場合は、「遊覧していたところ／嶺南の土地に至ってみると／山川水土や人居物態／言語の操り方が／奇怪で異なっていた／未だに古風で／衣服凡節が／京城と異なっている」というところから始まる跋文性格の文から判断すると、嶺南（慶尚道の別称）という経験したことのない土地の人物と風光・風俗が過去の自らの日本での経験を衝動しながら表現の欲求を呼び覚ましたもので、あくまでも文学的衝動に伴う「創作」であるものと思われる。したがって創作の時期も使行直後ではなく、創作欲が興じた時点一即ち、見聞7年後の1902年であった¹⁹。一方、金綺秀の執筆動機は報告と見聞の中間的位置にあるように思われる。金綺秀は次のように記している。「要は、後に私が田園に帰老した際に、田夫野叟とともに異国の奇異な風俗について畑のうねで話をするためのものであった。²⁰」すなわち、「物語」（譚絶域奇聞）的な構造が彼の記録に叙述上の豊かさをもたらしている。公式な使行に伴う著述であり、朝野において読まれた痕跡もあるが²¹、金綺秀の記録は「文物と事件の事情」を記録した紀事本末体の様式であることから、他の公務日誌形式の見聞録と比較すると、新文物に対する叙述が詳細かつ精巧である。修信または駐在という包括的任務は金綺秀と李台植の文に相当程度の自由を与え、他の記録に比べて経験的で個人的な視点化と提示方式を可能にしている。

第二に、比較的旧教養人であったといえる金綺秀・朴戴陽・李台植の場合は、その経験に対する反応が大変激しい一方で、そうした経験に対する叙述は極めて精巧であることがわかる。反面、技術官僚または開化派の代表者であった李櫨永と朴泳孝の汽車経験は、比較的疎略された方式となっており、感情の揺れ幅を推し図ることは難しい。特に李櫨永は、「ものづくりについていえば、いわゆる蒸気機関[大輪]の回る速度は雷のように速く、器物の創られる速度は神業のようであるが、造幣、製紙や木材の仕上げ、皮革の仕上げ、糸を紡ぐことなどが、全て蒸気機関のように行われている²²。」として、汽車をはじめとする日本経験の全体を貫くキーワードとして、蒸気機関（大輪）を比較的科学的・原理的な見地から把握していることがわかる。

¹⁹ 著述の動機と過程について、崔庚賢「幕府日本と維新日本の風物」、金泰俊・蘇在英編『旅行と体験の文学』民族文化文科刊行会、1985、180頁。

²⁰ 金綺秀『日東記遊』『海行摠載10』民族文化推進委員会、1977年、281頁。

²¹ 少なくとも、金綺秀使行の記録である『日東記遊』の一部の別単は承政院を通して朝廷に進呈された。前掲書、254頁。

²² 李櫨永『日槎集略』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、21頁。もちろん、彼もやはりある驚異の瞬間に到達する。「汽船は一日に千里を行き、汽車は一時間に百里を走るが、人の力でこのようなことができるだろうか」前掲書、21頁。

他方、李櫛永と朴泳孝の記録は比較的、共に経験の表象に無関心な反面²³、「時間（正刻）」と汽車が結ぶ関係、即ち、汽車の実際の運行が厳密な時間と距離との体系であり、かつ計算の結果であることを意識しているものと思われる。李台植が「千里を走ってきたというが、5、6時刻に過ぎない」²⁴として、迫真ある表現のための経験の誇張が見られるのに対し、また、金綺秀が「雷の如く走り、風や雨のように躍動した」として、対象そのものよりも対象が与える衝撃を提示することに焦点を当てているのに対し、李櫛永と朴泳孝らの記録は淡々として価値中立的である。李櫛永と同時期に紳士遊覧団（＝朝士視察団）として日本に派遣された朴定陽の記録においてもまた、出発と到着時間を正確に記録しようとする衝動以外の反応を見出すことは困難である²⁵。

第三に、情報と教養が経験の表象と結ぶ関係の問題である。金綺秀と朴戴陽、李台植の場合、汽車（搭乗）の経験と関連した事前情報が皆無であるか、比較的少なかったものと思われる。新文物に対する感覚的、情緒的、理念的な準備が不足していた状態で、これをひとつの衝撃として受け入れていることは明らかである。「車体は安穩で全く揺れることがない。ただ、左右に山川や草木、家屋、人物が見えたりはするが、前に表れたかと思えば、次の瞬間にはもう後ろに見えたりして、何が何なのか到底わからなくなってしまう。」という表現からもわかるように、自分の身体が位置している汽車の外に過ぎゆくものを殆ど焦点化することができないでいる。反面、そうしたことに対する衝撃自体については、比較的詳細に記録している。日本各地の自然の風光、人文地理、風俗に対して、朝鮮のそれと比較しながら非常に詳細な記録を残した金綺秀としては、この時点に至って視覚的混乱だけではなく身体的感覚全体または思考の枠自体の衝撃を経験していたものと思われる。ところが、こうした衝撃の表現はペリーが贈呈した模型機関車をその屋根にうつぶせになって試乗したという河田八之助の記録とも奇妙な類似性を見せている。河田は、この時の感想を次のように述べている。「火発して、機活き、筒煙を噴き、輪皆転じ、迅速飛ぶが如く」²⁶。実際の速度（時速32キロ）が問題であるというよりは、

²³ 実際に金綺秀使行記では約20.9km（東京－横浜）に過ぎなかった鉄道の総距離は、朴泳孝が全権大使として遣わされた1882、1883年頃には376.3km以上に拡張されており、その分普遍的な経験になりつつあったと言える。

²⁴ 京都駅から神戸駅までの鉄道が正式開業したのは1877年（明治10年）2月5日であり、京都駅から大阪駅までは一日10回往復、大阪駅から神戸駅までは11回往復列車が設定された。神戸から大阪を経由して京都に至っても距離のうえでは千里（400）にならない。一方、金綺秀が搭乗した横浜－新橋間の鉄道の走行時間は最短53分だった。

²⁵ 例えば、「午後正一刻に火輪車に乗った。初二刻にならないうちに大阪府に着いたが、来た距離は九十里である」（午正一刻乗火輪車、未初二刻、抵大阪府九十里）、朴定陽「從宦日記」『朴定陽全集』亜細亜文化社、1984、374頁。同じ本のほかの部分も大同小異である。開化期見聞録の時間と距離、度量衡に対する執着とそれに対する解釈としては黄鎬徳「国家と言語、近代ネイションとその表象様式ら」ハンギョヒョン編『近代語・近代媒体・近代文学』成均館大学校出版部、2006を参考。

²⁶ 湯本豪一『日本近代の風景』チョンソンテほか訳、グリーンビー、2004、362頁。

完全な視点の移動、身体的衝撃が知覚に波乱をもたらした結果であろう。身体の手度、または身体の手延手である乗り物（馬、輿）の手度とは異なる異質的な移動機械が観察者の視点を揺るがしたのである。並べている「家（屋／軒）」が動き、外部への窓は目の眩むガラスであるということ。

儒者の視点とは、ある種の停止状態、または超越的状态においてものごとを手理念的な調和の中で把握しようとした方式であったともいえる²⁷。彼らの視点が、いわゆる「山水画」に代弁される景観意識の中にあつたからこそ、動くものを動く視点を通じて把握することが極めて難しく、困惑に値する事であつたかも知れない。これに比べ、新進官僚として比較的豊富な情報を持っており、その事務が関税と和親という比較的明確だった李徳永や朴泳孝の場合、汽車自体の描写にはこれといった関心を示していない。そうであるならば、文明事物に対する情報が朝野に流布した以降の使用であると判断される 朴戴陽 と 李台植の場合、そうした情報にも拘わらず再現の過程は何故このように詳細で長いのか。もしかすれば、ここには自らの教養と衝突する部分、またその記録が前提とする読者たち（朴戴陽 の場合は旧教養人、李台植の場合はハンブル解読者）たちの問題が介入していたのではないかと思われる。

第四に、メディアやジャンル、エクリチュールの違いがある。汽車の中から眺める窓の外の手風景を描写するにあたって、最も迫真感あふれる構成を見せているのは李台植の『大日本遊覧歌』である。彼は、窓の外を過ぎ去るものを殆どパノラマ的構成に近い描写方式を通じて繰り広げている。これは風景の連続的描写を担当してきた紀行歌辞の手持つ様式的特質が大きく作用したであろう。更に彼は経験に秩序を与え得る時空間的距離を確保していた。即ち、1895年の視点から日本を手旅行した李台植は、多少の汽車に対する情報は得ている状況であり、これを嶺南という「紀行」の手場所、7年という時間的格差（1902）を手頭の中で再構成して表現していたのである。既に1896年には朝鮮の京仁線（総33.2km）が開通していた。この歌辞が示す汽車の中の手風景におけるパノラマ的構成は、感覺的躍动感、事物と時間の内面化、朝鮮という表象空間の変動、記憶の流れなどに依存しているのかも知れない。また、ハンブルというエクリチュールと関連して、我々は身体的経験を身体化されたことば—ハンブルの歌辞を通じて表現するジャンルの特徴が経験を表象するにあたってはより効果的な表現を供給したと考えることもできるだろう。（勿論我々は、こうした差を生む文士としての個人的才能も見過してはならないだろう。）

2.2. 手速の経験、山水の解体

我々はここで身体的感覺と情報との関係、身体化された意識理念が感覺的領域を

²⁷ 朝鮮朝の理想社会に対する考えが風水を手始めとする人間体験の感覺的部分と結ばれる関係について、また山水画が描き出すユートピアが知覚作用の限界概念として存在する理由について、金禹昌『風景と心—東洋の絵と理想郷に対する瞑想』考えの木、2003。

通じて世界と関係を結ぶ方式について考えさせられる。金綺秀の体験と比較すると、李台植の歌辞は経験を秩序化する方式において遥かに大きな柔軟性と直接的な感覺性を示している。目で見たものを口で吐き出すような口語体は迫りくる風景をそのままパノラマ的に構成する方式を通じても表れている。その典型的な事例が汽車に乗った際の風景描写なのである。しかし、『大日本遊覧歌』をはじめとする開化期の日本見聞に流れる情緒とは『日東壯遊歌』（1764年使行）のような壯快感とは相当な距離があるのも事実である。むしろ、風景を描写しながら次第に高揚していく主な情調は、衝撃に続く自壊感と絶望感であるというべきだろう。

1876年の江華島条約以降の最初の修信士として派遣された金綺秀は横浜から新橋まで火輪車に乗ることになる。それは、朝鮮人にとっての最初の経験であった。彼はその初対面の場面についてこう書いている。「車がもう前で待っていると言われたが、駅楼の外からも、また廊下に沿って数十間を過ぎては一向見えなかった。長行廊ひとつが四十五間にもなるものが道に横たわっていて、「車はどこだ」と聞いたところ、これが車だという²⁸」。

汽車を目の前にしながらも車はどこだと聞かざるを得なかったある知識人の「知識」がこの瞬間に根本的な危機に逢着したことは明らかである。認知すら不可能であったこの「火輪車」。汽車は彼が考えていたものごとの秩序一家や樓閣のような空間の区画の中でとらえられる一方、実際には自らが設定した秩序の外部へとすり抜けて行く。言語が一人の個人の属する表象体系の一部であるならば、また、その表象とは根本的に一貫した言語体系の中でひとつの事物を位置させ、その周辺の語彙集を通じて対象をひとつの秩序の中に安定的に統合させるものであるならば、彼（が属する朝鮮社会）はまだこの見慣れないものを表象できる言語を持ち合わせていなかったかも知れない。

近代日本に対する「最初の報告」という任務を遂行しなければならなかったこの誠実な旅行者は最大限の注意を払って汽車の形状と線路の構造を朝鮮社会の持つ語彙である家―廊下―火輪―引―雷（風顛雨狂）などの単語で描写して見せる。にも拘らず、一瞬これらの表象には絶対的な限界が訪れる。それは、身体全体を含む感覺の限界に由来する。全く新しい速度の経験は、この部外者の目を眩ませ、汽車に乗った彼はものごとを弁えることができなくなる²⁹。山水や家、まんなの姿が「何が何だかわからない」ものになってしまう。光の修辭は逆に眩んでしまった目と共に訪れたのである。今すぐにでも天の調和を奪ってしまいそうに見えるこれ（則直奪造化）。

過ぎて行く風景と人々。向こうから来た車に乗った人々に挨拶をしていた金綺秀は、汽車が「即座に炎を放ち、嵐のように過ぎてはあっという間に見えなくなるの

²⁸ 金綺秀『日東記遊』『海行摠載10』民族文化推進委員会、1977、62頁。

²⁹ 前閃後爍、不可握腕、前掲書、73頁。

で、頭を掻きながら言葉も出ずに、さびしく驚くのみ³⁰』であると述べている。目の前の他者を一気に移動させてしまう速度の前で、彼は人間（関係）の概念を新たにとらえ直す必要性に迫られたのかも知れない。すぐ目の前で対面するも、現代の人間たちは移動空間ですれ違う多くの人々に対して決して「出会い労苦を尋ねる」（面面相覷問労）ことは滅多にしない。勿論、残念で、ごちなく、言葉が詰まることもない。しかし膨大な量の物的、人的な風景の量にも拘らず、金綺秀はそこで一種の喪失感と膜たる思いに駆られることになる。

大量輸送の速度装置に対する彼の驚異感は、大量情報の速達を可能にする電信の経験にも表れる。「この法は信じられない。殆どが例え針体が速いとは言っても、一文字回って十字、百字の多い文字に至っては時刻もまたそれだけ多く掛かるはずではなかるうか」。しかし「光が煌めいて、直に線を伝って上り」「万里の距離に伝信しても偏に同じ時刻に着くのであるから」彼としては、ただ「これは全て私の見たところ、聞いたところであり、聞いたのも詳細に聞き、見たのも実際に本当に見たので、恐れながら嘘とは言えないのである」と強弁するほかなかったのである。彼の叙述上の精巧さと煩多さは、このように指示し得ない対象を回りくどくしかなかった表象の粹、表象と関連した社会システムの差異から来るものでもあった。こうした漠たる思いと息苦しさの感情は、こうした文明事物全体に対する問い、またそうした文明事物の中から世の中を見ることのできない自分（が属する社会）に対する次のような連鎖的質問を生み出す。

人間が一種類の物を作るためにはひとつの性能の器具の下においては、何でも作りたように作ることができた。私はため息をついた。「技巧がこれほどのものなのか。ひとつの火輪を以って天下のものごとを操ることができる技巧とはいったい何者なのか。孔子が語ることのなかつた怪であり、私は見たくない。」以前、私に遊覧をするなど言っていた者は正しく、私に遊覧を勧めた者は正しくなかつたが、私が正しい言葉に従うことができなかつたということは、私の遊覧もまた正しくないことであろうか。奇技淫巧もまた、ことばでは、これを以って利用厚生だと言う。利用厚生であるならば学ばなければならないものであろう。見るくらいではどうということではなかるう。ゆえに、私の遊覧も正しいのかも知れない。私はこうした問いに次のように答えたい。「彼らが私に遊覧するように勧めたのは実に道理に背くことではなく、同時に私の遊覧もこちらから急いだものではない」と³¹。

³⁰ 前掲書、64頁。

³¹ 前掲書、238～239頁。人以一物 一器之下 無不如所欲焉 余噫曰 技之此乎 一火輪以天下之能事畢矣 技之此乎 子之所不語也 吾不欲觀之矣 曩之阻余遊者是 勸余遊者不是 而余不得從其是者 然則余之遊 其不是與奇技淫巧 亦惟曰 是將利用而厚生 利用厚生

彼は「別単」を通じて高宗にこう告白している。「奇技淫巧のようなものはいくら見ようとしても全てを見ることはできず、口で伝えようとするむしろ詳細に知ることにはできません。ただ、船と車にのみ火輪があるのではなく、火輪が一度設置されることによって...火輪を以って天下のものごとを操ることができるのです³²。」彼としてはこれを「勤慎守拙」の伝統的政治原理で結んではいるものの³³、こうした危機がそうした方式で克服できない性質であることは、彼の溜息や繰り返される自分自身への問いかけ、仮想の読者に向けた連続的な事実確認の誓いを通じても証明されている。彼は何度も強調している。「私」が見たものが我々の信念や空間理解、表象の体系の中では信じられないことであるとしても、「私は私が提示したそれらを真に見た」のであると。

速度と政治、速さと階層の問題について語りながら、ある現代哲学者は東西が分離する一瞬についてこう述べている。西欧の速度競争が、結局は歴史の問題であると同時に政治の問題、生存闘争の一部であったという。「人口が少ないにも拘らず、西欧人は優越で支配的であるように受け止められてきた。彼らの方が遥かに速いと思われたためである。西欧人は非常に活発な（sur-vif）者たちであったからだ。フランス語の「ビフ」（vif）には少なくとも3つの意味をもつ。暴力（急激な武力行使、突然の激しさなど）の比喩である機敏さや迅速さ（速度）、また生命それ自体（生きている、生命が繋がっている！）。疾走政の形の進歩が実現すると、人類はそれ以上多様に存在することはできなくなる。人類が、単に希望的な人々（いつか訪れる未来に希望を見出し、今からそのための速度を蓄積することを許された人々、そうして可能性、即ち計画・意思決定・無限大に近づくことができる人々：速度は西欧の希望である）と、劣等な技術的運送装置のために限られた世界でその日暮らしをするしかない絶望的な人々のみに区分される傾向が生まれたのである」（強調はビオリオ自身による）³⁴。即ち、ある意味において移動権力こそが近代の支配的な力なのである。世界が画一的な時間の支配を受けている空間（timespace）の均質化のなか、朝鮮のある官吏は、こう書いている。「朝鮮の士大夫は中国の三十年前の如く」³⁵。「遅れ」の意識は、身体的な不適応を通して進歩としての歴史、強力政治の概念をもたらし、かくして自分が属している朝鮮という社会集団を「遅滞」のイメージとして書き込むことになったのである。

學之可也 況觀之乎 則余之遊 其是與 余惟曰 彼之勸我遊 固不反道 而我之遊 無自我先而已也。原文は『日東記遊』、256頁。

³² 前掲書、271頁。

³³ 「謹慎、守拙して、ただ彼らとともに六経の日月[聖人の道徳]と三皇の意相[聖君の制度]に帰るのが上策」前掲書、279頁。

³⁴ Paul Virilio, *Vitesse et Politique*, Calilée, 1977、ポール・ヴィリリオ『速度と政治』イジエウオン訳、グリーンビー、120頁。

³⁵ 「第本國 尙如中朝三十年以前 士大夫 未悉外國事情 辨此極不易 是爲憂憫」金弘集「大清欽使筆談」（1880）、『金弘集遺稿』（影印本）、高麗大学出版部、1976、316頁。

何よりも汽車の速度は、この世界の変化する速度、不可避な変化の次元を意味していた。「日ごと変化するのが今日の世の中であるから、私はある日変わるものごとを変化させないことはできないと思います」という中村正直の「どうしようもない状況」に対する話に李櫛永は「正論です」³⁶と答えている。朴泳孝は、こうした文明の異質性の極点を、一層のこと「新たな自然」として理解すべきであるとしている。「人巧を以って天然に至るは、到底日本の能事である」³⁷。到来しており、現実的な脅威として一斉に登場する全ての驚異一米を輸送する汽船、外国軍隊、国内の情報を打電する電信、その全てが、速度が力となる時間の産物であった。10余年後の李台植はこう書いている。「嘆かわしい我が国よ／堂々たる礼節を以って／一時は奮発したもの／富国強兵ができずに／あのような夷狄に／こう見辱をすることの／嘆かわしく、悔しい思いは謂うまでも無からず」³⁸。こうした速度に対する感覚と思いが示すのは幾つかある。先ずそれは、進歩としての歴史という概念を呼び起こす。またそういう具体的表象たちは権力の問題を呼び起こしている。第三に、こうした感覚は身体的・具体的不適応という事実を通じて、自らの属する社会集団に「遅滞」のイメージ³⁹を与えることになる。

よく文化のエピステーメーは、自らをエピステーメーとして認識できないと言われている。森の中では森を見ることができないのと同様であろう。確かなことは、これが意識される時、他の認識の秩序の可能性が生まれるという事実である。加工されない事実があるとすれば、即ち表象体系の外に滑り落ちて「提示」(presentation)の形態でのみ露わにすることのできない感覚的経験があるとすれば、それは幾つもの秩序の可能性を意識させながら、自らの属するエピステーメーの彼岸を暗示することになる。知識の多元的可能性が反省的に認知されにくい場所、具象と抽象がひとつになり、観念と現実を一つに結びつけようとする表象の枠の中に存在したのが朝鮮朝の思惟のスタイルであるならば⁴⁰、こうした外部性の経験は根本的に新たな時代を予感させながら、そうした時代の中に置かれた朝鮮という社会に対するある種の新しい批判を生んだものと思われる。不安の感情こそまさにその始まりであろう。

風景への感覚は幸福への幻想と地理的現実をひとつに調和させることによって、土地に対する考えを支配する規範的尺度となる。それは朝鮮にとって、山水画または叙景詩として代弁されてきたものでもある。しかしそうした調和と規範が新たな

³⁶ 李櫛永『日槎集略』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、271頁。

³⁷ 朴泳孝『使和記略』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、370頁。

³⁸ 李台植著、崔庚賢訳注「大日本遊覧歌」『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソン出版社、1999年、45頁。

³⁹ このような時間に対する感覚は金弘集の詩空間の歴史観からも見出すことができる。黄鎬徳、前掲書、114～122頁。

⁴⁰ このような思惟の偏向を朝鮮の絵を通して説明する事例として金禹昌『風景と心—東洋の絵と理想郷に対する瞑想』考えの木、2003、43～44頁。

旅行、近代風景によって解体的局面を迎えていたのである。

勿論、見ないとする意志、速度や機械を見下そうとする感情、新文物に対する自らの憂慮自体を杞憂に見なそうとする意志もまた、簡単に消滅したりはしなかった。いわゆる「西洋の淫巧」と「倭の蛮風」を見た朴戴陽はそうした風景から自らが距離を置くことによって表象の安定性を確保している。「外に出れば悪気押し寄せ、杞憂で胸が一杯になる。一日中扉を閉め、翰墨に寄せようとするが、まだ美しい趣もなく、ふと見ると文机の上に小さな梅の花が二、三咲いていて、更に家と祖国への思いが募る。筆を走らせ絶句三つを作った」。またそうした感情は日本という空間全体を無秩序で調和の取れない空間として把握させている⁴¹。

ひいては、通信使と修信士らが偏に絶景であると高く評価した琵琶湖に至っても、彼は「美しい扁額もなく、また古今人の詩句も建てられていない。ひとつの行き交う商人たちが貨物を運び入れ計算するところであるのみ。天機を保有するものの、また人巧を加えるとは真に惜しいことなり」⁴²と書いている。文明の産物と技巧の精巧さから来る衝撃は、その逆作用によって自然の産物まで評価の領域から追放する結果を生んでいる。『東槎漫録』の最後の章の儒者朴戴陽の詩は新聞というメディアを批判しながら、こう締めくくられている。「冷笑に値する。葛藤のみが蔓延る悪鬼の地よ／風を呼んだり、また雨を呼び込むことに過ぎないのだ」⁴³。しかし彼のそうした意志は見聞の対象を通じてではなく、「回帰」への欲望においてのみ表現され得る、また極めて限定された詩材（梅、故国、文字）の中にのみ表現し得るものであった。

「梅はまともに咲き誇り、鶴がひとりでにきて鳴くところ」から「広く畑を耕し、書物を読む処、知るのに何処か」⁴⁴と書くこと。確かに、ユートピアへの想像は「慰め」になる。それは実在する場所を作り出すことはできなくとも、驚きに満ちて不可思議な均質的な近代の外において花咲く。反面、「葛藤のみが蔓延る悪鬼の地（葛藤横魔界）」。「ヘテロピア（混在郷）は不安を呼び起こす。言うまでもなく、それは隠密に言語に穴をあけ、物事に名付けることを妨害し、共通の名を破壊し、入り乱れさせる。結局、統辞法—近くにあるか対立する事物を一緒に結び付けながら、「ことばのもの」をともに支える統辞法はヘテロピアの中で崩壊するに至るのである⁴⁵。

何故、旧教養と山水の体系の中に存在する人々こそ、これほど悠長に、煩多に文

⁴¹ 朴戴陽『東槎漫録』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、444頁。

⁴² 同上、450頁。

⁴³ 「堪嗤葛藤横魔界/不過風乎雨亦呼」朴戴陽『東槎漫録』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、466頁。

⁴⁴ 「梅自垂花鶴自悵//隆中耕読知何処」朴戴陽『東槎漫録』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、460頁。

⁴⁵ Michael Foucault, *Les Mots et Les Choses*, Gallimard, 1966、ミッシェル・フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974、16頁。

明の「魔界」を描くことができたのだろうか。ミッシェル・フーコは物語の基層は結局のところユートピアに依拠して構成されざるを得ないとしている。即ち、ユートピアが物語と言説を可能にしているのである。ヘテロピアは一貫して豊かな修辞を枯れさせ、その場に踏みとどまらせ、いわゆる文法や作法の可能性に対して根本的な異議を提起させる。それは神話を解体し、文章の抒情を不毛にする⁴⁶。しかし逆説的に言えば、ユートピア—山水の体系に基づいて統辞法を通じて、金綺秀と朴戴陽はヘテロピアの「魔界」を書くことができたのかも知れない。彼らはユートピア的表象体系とヘテロピアの不安のあいだで、再現と提示のあいだで語っていたのである。「千百の技巧はことばで語り尽くせない」⁴⁷としながらも、これを描写し「提示」することができた理由は、揺れる表象の体系自体のジャンルの安定性のためかも知れない。特に李台植の『大日本遊覧歌』の場合、「ハングル」歌辞という発話の直接性が自らの感想をありのままに表現する「提示」によって、評価と秩序化を要する「表象」の強迫から相対的な自由を取り戻すことができたことも見過ごすことはできない。反面、こうした崩壊をそれ自体として受け止める時、ナラティブの動きは止まり、文章は抒情が消え去った技術的なものになってしまう。官僚たちの記録に表れる不表現の不毛性と疎略感を我々はこうした観点から理解することもできよう。

3. 眺望、高さの思想

3.1. 視線と支配

「時計」の時代思想としてデカルトがいたとすれば、機械の時代を代弁する人物はマルクスであろう。デカルト哲学が道具（時計）とそれを操作する意識主体（コギト）という観点から始まったとすれば、「蒸気機関」時代のマルクス近代文明の理解において労働者は単にその機械の一部のみを操作できる付随的存在になってしまう。マルクスによれば、蒸気機関が原動力となる時、機械の工程は原動装置、変換装置、狭義の機械（道具）の三つの段階に分離され、人間はただその最後の工程にのみ関与することができるためである。極端な言い方をすれば、『資本論』には主体が不在している。ある意味、何かを表象し、その過程全体を掌握できる主体自体は儒学的教養人のみならず、近代人全体にとっても失われたものであるというべきだ。ひいては、資本家たちすらも、資本の「機械的」運動の代理者であり、主体ではない。

⁴⁶ Michael Foucault, *ibid.*, p. 16.

⁴⁷ 実用または原理的次元の陳述の向こうに存在する、差異そのものに対する描写は対抗的空間の存在によって生成される。「千百のもの／使えるものも多く／手で作られ／奇異で大切なもの／材の神通さは造化を奪っているが／一度笑うだけで／ただでくれたってどこに使うのか」李台植著、崔庚賢訳注「大日本遊覧歌」『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソン出版社、1999年、43頁。

生産の全過程を掌握して裁断する匠と職人の体系は、「美的なもの」と同じく社会的「剰余」の領域に追いやられる。芸術が失われた総体性を見出すための航海の一部として話される余裕もここにはある。そうした時、この統制できない世界に対する不安は、文明全体をどうであれ自らの視野に入れたい欲望を呼び起こすことになる。また、これは「眺望」の持つ本質的屬性としての権力欲が近代文明の大きさに適応した痕跡でもある。エッフェル塔をはじめとする世界の都市のどこにでも存在する眺望施設、機械文明の剰余空間がまさにそれである。一見、無用に見えるこれらの眺望施設は、破片化された経験を「高さ」の観点から統合的にとらえようとする近代人なりの全体化への試みであると言える。それは、都市が生んだ機械文明に対する自負心と誇示欲を表現するものとして、それ自体で近代文明に対する過信を表現するひとつの金字塔⁴⁸でもあった。コンラート・ローレンツは眺望と動物の生態について興味深い意見を提示しているが、要は、風景という美的なものの根底には戦略的生存価値が潜在しているという。

先ず彼は、「眺望」と「隠された家」という二つ観念を通じて、人間が何故より高い所に自らの視点を置こうとするのかという問題について説明している。原始人たちにとって、風景は「見えないながらも（隠された家）見る（眺望）」ことが可能であればあるほど高い評価を受けた。視野、遮断物、逃走可能な距離の確保などが複合的に構成された場所で彼らは安定感、即ち「美しさ」を感じたというのである。こうした動機は「視線による支配」と命名できるものとして、風景に向かう視線は基本的に見る者の意志に左右される「主権発動の行為」⁴⁹であるという。例えば、都市の塔に登り支配領域を確認するという意味の日本語の「国見」、ラテン語におけるtemple（寺院）とcontempler（凝視する）の語源的関係のように、見るという行為は一種の聖なる行為として、原始時代の王＝聖職者によって儀式的に行われた。眺望するということは、政治宗教と関連した生存または宇宙論的秩序に基づいているもので、視線には権力や信念と関連した極めて政治的な意味が潜在しているのである⁵⁰。

勿論ここには、そうした眼下の対象を視線によってとらえることができるという

⁴⁸ 政治から美学へ移動する眺望施設に対する事例をよく見せてくれるものとしてエッフェル塔 建築当時の芸術家の抵抗が挙げられる。エッフェル建設に対する陳情書に主旨は次のようである。「金儲け一辺倒のアメリカですらお断りと言うであろうような、黒々とした巨大な工場の煙突は、ノートル・ダム大聖堂やルーヴル宮や凱旋門や廃兵院などを小さく見せ、辱めることとなる。」エッフェル塔を「商売一辺倒のアメリカ」化と認識し、これを工場に比喩したモッファサン、クノなどの芸術家、知識人連名の陳情書について、松浦寿輝『エッフェル塔試論』筑摩書房、1995、11頁。この文章の一部はバルタ・ベンヤミン『アケードプロジェクト』チョヒョンジュン訳、新たな流れ、2005、456～457頁でも見ることができる。

⁴⁹ Augustin Berque、オギュスタン・ベルク『日本の風景、西欧の風景』篠田勝英訳、講談社現代新書、1990、18～20頁。

⁵⁰ 前掲書、22頁。実際に徳川幕府をはじめとする多くの権力が権力者の「眺望点」を上回っているか肉迫しているすべての建築物を禁止・制限してきた

考え、自然産物と人間産物の原理または秩序を理解できるという信念が前提となっている。近代においてそれは、蒸気機関に代弁される機械文明に対する信頼を意味する。しかし既に検討したように、自らの統制を離れた世界を視線の幅の観点から掌握しようとするのは、人間本来の欲望と関係している。

3.2. ある儒者のめまい

微妙な差異を認め、区別しながらナラティブ化できるということは、ある意味「距離」と関係している。近代人にとっても、いや、むしろ近代人こそが「距離 (distant view)」を必要としていたのである。主体を分離するために、あるいは対象の枠を組織するために、そして見る方式と見える方式自体を転置させるためにも、距離の確保は重要であった⁵¹。しかし、そうした距離は単に高い所に登って眺望点を確保するものを通じて直に達成されるものではない。その都市の場所を身体化された感覚のない人々には、それは遥か遠い地点であるが故に、部外者にとっては、依然としてその空間の幅と深さを確保するのに困難が伴わざるを得ない。

午後には遂行員二人と共に上野の平岡に登って見た。瓦が鱗のように敷き詰められ、海のように広がっているのを見ると、楡目の如く密に並んで連なっていたが、見えるのは全幅の10分の1に過ぎないというのにこの繁栄ぶりから察すると、東京管轄が23万5千戸というのも真に嘘ではない⁵²。

店楼に登り船を造る工場（廠）を眺めると、異なる高さ[参差]の家々が浅い霧と輝く星の合間に静かに光っている様子は、まるで一枚の洋画のようであった[如対洋画一幅]⁵³。

義和君が来られて見物に出かけよ／立ち上がり浅草公園を訪れると／十二階建の高い家が凝雲閣⁵⁴というなり／梯子を踏みながら上の上に登ると／あまりの高さに知らぬ間にめまいがし／東京中の億万家屋が四方に見え／往来する行人人たちは蟻のよう 小さく見える⁵⁵。

⁵¹ 佐藤健二『風景の生産・風景の解放』講談社、1994、5頁。

⁵² 朴泳孝『使和記略』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年、375頁。

⁵³ 同上、378頁。

⁵⁴ 凝雲閣は凌雲閣の誤植である。この誤植は原典である「大日本遊覧歌」の表記「凝雲閣」に基づいているようである。（影印本、81頁。）凌雲閣については湯本豪一『日本近代の風景』チョンソンテ外、グリーンビー、2004、466～467頁。また、エドワードサイデンステッカーの下記の本も参照。

Edward Seidensticker, *Low City, High City: Tokyo from Edo to the Earthquake*, Knopf, 1983. エドワードサイデンステッカー『東京の話』ホホ訳、イサン、1997、93～96頁。

⁵⁵ 李台植著、崔庚賢訳注「大日本遊覧歌」『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソン出版社、1999年、85頁。

世界の建築物としては一番高いという塔に登って見ると、パリの全市街地が眼下に見え、胸が爽快であった⁵⁶。

めまい。李台植が凌雲閣一別名「十二階」一で感じたのは、「限りない高さ」によるめまいであった。この限りなく高いとされた展望台の高さは200尺（67m）であると宣伝されたが、実際には173尺（52.4m）に過ぎなかった。しかし、その高さは当代東京の近代化の広さに比例したもので、相対的な高さにおいては、それこそ限りないという表現が妥当であったのかも知れない。江戸時代、都市にそびえ立つ建造物はお城の天守閣のみであった。明治は権力者の視界を庶民にも与えたのである⁵⁷。夜になると、全ての階に照明が付けられ、「光の塔」と呼ばれ、東京という近代化されて行く空間の象徴する場所で、李台植はただ蟻のような通行人たちを見て降りてきたただけであった。このめまいの意味するものは何であろうか。

いずれにせよ、こうした展望台の経験が店楼また丘の高い所に広がる風景の享有とは質的に異なる経験であったことは明らかであったと言える。身体を通じて次第に遠ざかる風景の上に立つこととは異なり、急に表れた「眺望」は一挙に感覚の混乱をもたらしたのである。2階から8階まで陳列された全世界の産物を見て、9階の美術館に登るまでの感覚は、急な波乱を起こし、ついに市内が一望されるべき場所に至ってこの観察者は、「主権者の幻想」や快感ではなく、めまいを感じるのである。彼にとって、ここは東京全体を統合的に「眺める」支配と主体化の場所ではなかったようである。「視線による支配」、見る者としての「主権発動の行為」が可能なためには、距離の確保、場所化された身体感覚が必要なのである。

これに比べ、西欧文明の広がりやそれをそれ自体として受け止め、自らが眺望の場所を選択している朴泳孝の視線は、誇張して言えば遥かにパノラマ的である。朴泳孝の場合、このように変転する風景を「めまい」としてよりは、それ自体の感覚—「西洋化された風景」（洋画一幅）として理解しているのである。というのも、「開化派」の領土者としての朴泳孝はそうした風景のフレーム自体をひとつの先行知識の形として所有していたと思われるためである。彼は既にそうした風景を「洋画」というメディアを通じて予め経験していたのである。そうだとすると、「世界の建築物としては一番高いという塔に登って見ると、パリの全市街地が眼下に見え、胸が爽快であった」（朴勝喆、1922）という凡々な眺望の表現に至るまで—即ち、対象と主体を分切する視線の配置に至るまでには相当な時間と先験的知識の存在が必要だったのかも知れない。

知識或いは高さが結果するひとつの距離（distant view）は、ある空間に対する

⁵⁶ 朴勝喆 「パリとベルリン」（1922）『植民地知識人の開化期の留学記』ソギョンソク・キムチンリャン編、テハクサ、2005、204頁。

⁵⁷ 湯本豪一『日本近代の風景』チョンソンテほか、グリーンビー、2004、466頁。

恐怖を弱体化させるものとして語られる。自らを外部に排除し、前提の外部に置く方法を通じて、逆説的に絶対的な大きさの空間がもたらす疎外を克服する一時的な方式または装置が、即ち展望施設でもあるのである。したがって、この眺望施設は全体を全体として置き、そこからの距離と逸脱を測る高度の権力装置—監視装置にもなった。しかし実際にそうした距離の確保は、単に物理的レベルの配置によって行われるよりは、そうした物理的装置と装置を受け入れることのできるメディア的な「訓練」を必要とするのである。それが欠如している時、そうしたイメージはひとつの暴力と恐怖して作用することになり、彼はその風景から安定感と美学ではなく、むしろ実際の恐怖—逃走のための距離を計算することになるのである。

例えば、李台植は近代化された歌舞伎の舞台で繰り広げられる戦争から、一種の迫力や事実性ではなく、現前（present）を経験し、そうした感覚から急いで抜け出している。

戦争見物も良いというのでそこにも行って見よう／大屋敷をいくつも建て／大きな戦争を繰り広げるとは／この戦いは何の戦いだ？ 出处を聞いて見ると／明治初年に開化党が徳川氏を追い出す際に／両陣営に分かれて交戦していたようである／多くの侍に多くの軍人、大きな馬よ／様々な兵仗器をこともなげに造り／注意深く見ても真仮がわからず／ある人が銃撃されて倒れて死ぬ様子／ある人は刀で切られて流血が著しく／頭のない屍が倒れて並び／集められた頭は片隅に山のように積まれているが／鮮血が流れ出しているのを見ると今しがた死んだようである／ある軍人は手足が切られても命を繋ぐも／立ち上がれずに苦しむ様子／ありとあらゆる状況や様子がいかにも天然で／いくら作り物とはいへ、見るに堪えず⁵⁸。

現実と仮想[真仮]、天然と人工のあいだで経験する困難と圧倒感 は明治の表象空間全体を表象ではない一種の強烈な「提示」として記述する方式で表れている。何が実在の表象で、何が実在性それ自体であるのかを判別することは思うほどに容易なことではなかった。李台植の紀行歌辞において、いわゆる反儒学的な「野蛮の風俗」を除くその他の文明、自然はほぼ対等な位置から現場感あふれる提示がなされている。通信使の記録によく見出される「詩興—山水（風景）—遠景画」と「批評—風俗—近景距離」の均衡はすでに壊れている。「男性の目の前で服を脱いで風呂に入る／羞恥に思わぬようだが見ているこちらが恥ずかしい／野蛮の風俗で男女間の分別がないにしても／これ程に無礼とは、豚や犬の如し」のような表現に見られるように、風俗に対する批評は依然としているが、遠景化された安定的山水の感覚は見出し難い。

⁵⁸ 李台植著「大日本遊覧歌」『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソン出版社、1999年、85～86頁。

むしろ距離の確保を通じた判断よりは、(文明)事物をそれ自体として提示することを通じて李台植は次第に空間を自らが処している「場所」として感じるようになり、これを自分の地位、朝鮮の現況とも対照するようになる。歌辞は次第に孤立感と疎外感、新文明の圧倒的力に対する挫折感として表される。

実際に義和君の日本での行跡を描写したある外国公使の夫人は、彼らの孤立した立場について次のように述べている。「今年で二十歳になるという朝鮮の若い王子(義和宮)を首長とする朝鮮の使節団の一行を、日本の高官と各国の外交団に紹介する目的で開催された大宴会であった。宴会は大変楽しかった。朝鮮の王子は多くの人々に腕の引かれながら宴会場を回り、我々も一人ずつ紹介されたが、私はそのかわいそうな王子に心から同情した。まもなく、王子が小松宮妃殿下を夕食の場所に案内するのに腕を貸している姿からも、滑稽な感じを受けた。王子は妃殿下をまじまじと眺めていた。それに、彼は強烈な興味を持ってもの珍しいように我々公使夫人たち全員をまじまじと見つめた。彼がこれまで西洋婦人を見たことがあるのかないのかも疑問だが、首筋と胸を露わにした服を着た婦人を見たことがないのは明らかである。もし彼の心の中が読めるなら、彼はきっと我々の姿に大きな衝撃を受けたに違いない⁵⁹。」傾きつつある一貧国王子がこの宴会場で感じたであろう感情を「朝鮮公使を招待するに婦人も同伴すること／手紙を貰ったが婦人たちと来たわけでない／誰と同行すればよいのか／まことに笑える話である⁶⁰」と書いている李台植の思いに照らして理解することは難しくない。

いくら種族誌的なフレーム—風俗の非礼と淫風、氣質の卑しさを強調しようとしても、日本を超えたある単位の「文明」が東京という駐在空間を掌握していた。例えば、彼は東京だけでなく、ある世界のイメージの中で、孤立を経験している。

大臣以下の主任官と各国の公使たちが／一堂に集まり／四、五百人にはなろう／皇帝以下の複数の百人の面々が坊主頭／その中、一青が冠帯に紗帽の姿なり／自分の姿が自分でも笑えるのに／彼らも心の中では鼻で笑っているに違いない／...／彼らどうして楽しく多くの酒を飲み／大勢が話しながら盃を汲み交わしているが／言葉が通じないので／息苦しく、無味で／自分はまるで借りてきた猫の如し⁶¹

わが国、礼儀之邦、列聖祖の衣冠文物／今日に当たりひっそりと姿を消す／夷狄禽獣になる姿とは一体どういうことか／...／止むを得ず行くとこ

⁵⁹ Baroness Albert d'Anethan, *Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan*, エルアノーラ・メアリー・ダヌタン『ベルギー公使婦人の明治日記』長岡祥三訳、中央公論社、1992、69～70頁。

⁶⁰ 李台植著、崔庚賢訳注「大日本遊覧歌」『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソン出版社、1999年、88頁。

⁶¹ 前掲書、82頁。

ろがあり洋服を着て／はじめて道を歩けば倭人と変わらず／誰に見つかる
わけでもないのに心恥ずかしく／人に会っても顔も上げられない⁶²

自らの服装と身なりの中で深い孤立感を感じる一方、そうした服装から逃れて他者と同様の断髪洋装の身なりをしても自らに恥ずかしさを感じるこの人。万国体制と礼儀之邦に「二重拘束 (double bind)」されてしまったこの身体は、いわゆる世界の至る所から来た人間たちの前で、言語、衣服、感情、作法などのような外部と繋がっている全ての感覚が断絶されたかのように感じる。日本天皇の天長節の風景を謳ったこの箇所、彼はそれこそ息苦しく、「無味」であると書いている。「自分たちどうして楽しく喜々としているようだ／一言もわからずただ逍遥するのみ／嘔吐所説安為聴⁶³がこれをいうのか？」という孤立感は次第に、自らに対する自壊の念に変わり、終には「世界の中の朝鮮」の貧しいイメージとして表れる。見聞を可能にする一朝鮮人の目と耳は、それぞれ近代的視線と民族語・国家語の体系の中で「聾啞と盲人」のそれになり下がることになる。

4. 感覚と理念—開化空間の身体、視線、イデオロギー

いったい風景と景観という言葉の差は何であろうか。この二つの単語は全て「景」—照らす行為、即ち対象に対する距離と解釈距離行為を前提としている。しかし、この二つの言葉には少なからぬニュアンスの差が存在する。先ず、景観が見る者と対象の間の分離を前提とした中立的概念として、「観る」という視覚的実践、判断・価値付与の行為であるのに対し、風景はより包括的で緩い意味の関連性を持つ。風景の「風」には風俗・風習や様式などの意味が含まれており、「風景」とは人間と自然が絡み合ったスタイル、習慣的であり身体的な実践のスタイルが含まれたより言語的に媒介された包括的な反応であると言える。「景観」が客観的な解釈の可能性と操作可能性に依存したもので工学や地理学の用語として汎用されているのに比べ、「風景」は人文学的探求と美学の対象になってきた⁶⁴。

いわゆる風景≠景観 (landscape) とこれをめぐる思考には二通りがある。まず、伝統的見解として、「景観」を現実の実体であり物質的変容の対象として把握する観点がある。こうした観点は地図化を狙う。その次に象徴と物質の間の相互作用において表象される「風景」の意味に着目し、「landscape」を人間と自然、社会的諸関係をめぐる実践の場所として理解する観点がある。彼らはこう尋ねる。風景を表象する思考形態の差異が風景の意味や理解をどの程度変化させるのか。世界はどのように解釈され、表象されるのか。

⁶² 前掲書、92頁。

⁶³ あしのしゃべることは聞き取れない。

⁶⁴ 佐藤健二「近代日本の風景意識」『景観を再考する』青弓社、2004、123～126頁。

したがって風景に対する象徴的または図上学的接近によって明らかになった認識があるとするならば、それは表象をめぐる政治学がそこ（landscape）に一特に風景（の表象）に深く介入しているという事実である。「風景とは単に「そこにある」何かではない。少なくとも、そこにはジェンダーや階級、人種、性的嗜好、その他の社会的差異を総括する権力の諸関係が引き起こす複合的で動態的な相互作用が存在する。風景はその中で社会的に構築されたものである⁶⁵。」このように風景画、写真、旅行（日）記などの中で表象された風景に関する解釈もまた解釈者の社会的・政治的・経済的・文化的位置によって規定されるのは勿論のことである。

端的に言うなら、こうした旅行のナラティブが繰り広げる異国の風景とは西欧文明または近代日本をひとつの異質な対象として認知し提示すること、また自己表象することに他ならなかった。その風景は社会的に再構築されたものであったが故に、当然のことながら解釈者の立場と教養、文化的位置に大きく影響されたのであり、何よりも時間の流れに沿って少なからぬ変動を経験せざるを得なかったのである。朝鮮は万国公法的世界、或いは資本主義世界の一部であり、その自らが独立した実体として、昔ながらの礼儀之邦列聖祖衣冠文物を通じて「朝鮮たるもの」を確認しなければならなかった。しかし、この二つは、表象の枠内において大きく不和とならざるを得ないものであるといのが正しいだろう。

そうであるならば、近代朝鮮の文明認識の大きな部分は、まさにこうした使行の経験を通じた他者の認識とそれに対する「叙述（narration）」の過程において構築されたものであると言っても過言ではない。文明間の垣根が取り払われる場所、近代性の経験と近代的アイデンティティーにおいて本質的なことは、他者或いは他者の中であって如何に自らを表象させることができるのかという問題であった。近代のアイデンティティーや自己表象はそれが国家であれ、個人であれ、超越的真理への献身を通じて個人に再臨する形ではなく、生きて死ぬ現実と売り買いを行う関係のど真ん中で自らを質問し、答える世俗的なものである。世界時間と万国公法に代表される当代の言説秩序と、それに破裂する伝統的嗜好を開明／開化期の見聞記ほど明確に見せてくれるテキスト稀であろう。

韓国と日本の開港。開化期の自己形成において最も急激な亀裂と嗜好の変化をもたらしたのは何よりも西欧文明（大凡、その変形としての明治日本）への体験であり、これは優先的に見聞録を追跡することによって確認可能であった。この横断的見聞こそが、ひとつの起点に還元されたり、ひとつの事件に圧縮することのできない近代理解の複合的姿と微妙な諸変動、個人の困惑と近代性に対する対応の原型的形態を測ることのできる主要なテキストであろう。何よりもそれは知覚の変化がどこから始まってどこに至るのかを暗示している。表象の段階以前あるいは彼方に存在する諸提示、美しさ以前に存在した恐怖と崇高の体験。感覚的経験から始まり、

⁶⁵ Susanne Seymour, "Historical Geographies of Landscape", Brain Graham and Catherine Nash eds., *Modern Historical Geographies*, Pearson Education Limited, 2000.

これを表現する方法として「提示」を選択し、こうした提示の過程において自らが属した社会を世界の中で判断することになるこうした流れは厳密に言って身体的なものから始まったというべきであろう。勿論これらの記録の担当者たちはそれを「文学」であるとは信じていなかったかも知れない。実際に彼らが住んでいた空間にリテラチャー（Literature）としての文学は存在していなかった。それは「復命」であり、朝野に対する通文であり、同時に官僚の責務であり、何よりも儒学教養人としての文事行為であったのである。開化を主張していた多くの人々が、まさにこのような文明体験・近代的表象空間（汽車、新聞、電報、航海）に対する衝撃と表象の危機を経て自らを更新させたという事実を忘れてはならないだろう。勿論従来の多分に心象地理的であった華夷論的天下観をより客観的な正名・正学の思惟に移動させ、決戦の義兵論にまで突き進んだ人々の一部がまた、既に見聞録を通じて西洋文明の野蛮さと資本の循環を見破っていたことも見逃してはいけぬ。西洋文明の到来を「通貨通色」であふれかえる野蛮性（夷狄の色）一例えば、兵による農の惨劇一と見るにせよ、文明化の必然性を見るにせよ、その原点には明治日本または西洋に対する見聞記が置かれている。開化の信念化や拒否は間違いなくひとつの「生きている文明横断」なのである。

周知の通り、近代国民国家の形成は西欧の衝撃に対する自己形成の側面とともに西欧への経験に対する積極的な理解過程の産物であった。資本主義的な世界の空間において朝鮮はこの先どのように生き、どのように自らを守るのか、またどのように帝国主義的な介入に対応する政治・文化的制度を作っていくのかという問題を包括的に構成するにあたって、これらの日本見聞録の感覚的経験と対象の提示は重要な役割を遂行した。より大きな枠組への移動を決定したものは単純な知識のレベルではなく、感覚的レベルの限界認識、自己表象に重ねて失敗を繰り返させる圧倒的速度と均質化された世界空間の体験であった。感覚の限界が思考の限界地点を見出し、表象の失敗から来る孤立感、漠たる思いや眩暈などの感情が「自己」の位置を推し測る認識を生んだ。例えば、火輪船を、米を運搬する黒線を悪魔と見るのか、米を運搬するに足る動力（蒸気力）として見るのかという問題は、何よりもその火輪船そのものを生みだした国家・制度への実質的な経験を通じなくては、依然として抽象的な言及に留まらざるを得ない。金玉均、朴泳孝、洪英植、徐光範などを革命に導いたのも、また、金允植、魚允中、朴定陽を時務・洋務・弁法に導いたのも、何よりも近代的空間と生活に対する直接的な「経験」であった。

端的に言うと、文明の理解は直接的見聞とそれに対する表象或いは「提示」、そうした提示を判断の領域に押しやる「感情」が揃うまでは、ひとつの抽象に過ぎなかった。開化勢力の殆どが1876年の開港以降におけるあれこれの外交的・軍事的任務を負って文明（化）空間を旅し、記録したという事実は、近代的表象体系とメディア、視線の問題を問う文学的研究においても重要な理解の枠組みを提供している。彼らは日本・中国・米国の文明（化）空間を直接その目で確認し、深い衝撃に

包まれ、比較的穩健な文士官僚であった金允植すらも清帝国の洋務空間などを歴訪した後、朝鮮の方略修正を建議している。開化の担当者または擁護者たちのほとんどが、修信使・紳士遊覽団（正式名称は「朝士視察団」）・報聘使・領選使たちであり、そのうちの相当数が旅行記録・見聞日記・視察報告・復命記・見聞歌辞・公使館記録などの見聞録を残しているという事実は、今後の持続的な検討を通じてより包括的な文化政治学の形で再検討されるべきである。こうした見聞記による近代経験の表象・提示とその具体的実践としての意識と表象空間の変動は近代的メディアである近代文学の成立の最も源泉的な根拠となる。

エドワード・サイードの『オリエンタリズム』以降、西洋人、または文化優勢勢力による民族誌学・人類学的叙事物は、「文明と野蛮／植民と脱植民／文化と人種」などの図式の中で多くが語られてきた。こうした批判的比較文明史の流れは韓国の何人かの研究者たちが試み、朝鮮ことば・旧韓国の近代を外国人の旅行記や記録を通じて検討しようとする努力として具体化されている。しかし、いざ朝鮮人の近代見聞録は比較的文化的な注目を集めることができずにいる。マサオ・ミヨシ表現を借りれば、「彼らが我々を見る方式／彼らが我々を見た時」に対する研究は、「彼ら見るままに」韓国史学の補充物として比較的活発に研究された側面も否定はできないが、いざ「我らが彼らを見る方式／我らが彼らを見た時」に対する精緻な言及や体系的な統合研究は未だ始まりの段階にある。文明のあいだ（trans/inter）の接触面、即ちコンタクト・ゾーン（contact-zone）という境界で、全てが構想され、揺れ、また再構築されていた。具体的な感覚と理念の視線化が混沌とする地点に対して多少長い解釈を加えたのもそのためである。

<参考文献>

<資料類>

- 金綺秀：『日東記遊』『海行摠載10』民族文化推進委員会、1977年、203頁
 朴戴陽：『東槎漫録』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年
 朴泳孝：『使和記略』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年
 李櫛永：『日槎集略』『海行摠載11』民族文化推進委員会、1977年
 李台植著：崔庚賢訳注「大日本遊覽歌」『朝鮮外交官が見た明治時代の日本』シンソン出版社、1999年
 李台植著：崔庚賢解題「日本遊覽歌」『文学思想』1975年11月号
 朴定陽：「從宦日記」『朴定陽全集』亜細亜文化社、1984
 金仁謙：「日東壯遊歌」シムジュワン編・解題『日東壯遊歌・燕行歌』（韓国古典文学大系10）、教文社、1984
 朴勝喆：「パリとベルリン」（1922）『植民地知識人の開化期の留学記』ソギョソク・キムチンリャン編、テハクサ、2005

<韓国語文献>

- 金禹昌：『風景と心—東洋の絵と理想郷に対する瞑想』考への木、2003
- ソングェヨン：「『大日本遊覧歌』に表れた日本と日本観」『東洋学』vol.33、檀国大学校東洋学研究所、2003
- 李慧淳：「17世紀通信使行集団の文学と意識世界—南龍翼『壯遊』を中心に」『韓国漢文学研究』第17集、韓国漢文学会、1994
- 崔庚賢：「幕府日本と維新日本の風物」、金泰俊・蘇在英編『旅行と体験の文学』民族文化文科刊行会、1985
- 崔庚賢：『韓国文学の考証的研究』高麗大学校民族文化研究所、1996
- 河宇鳳：「新たに発見された日本使行録等—『海行摠載』の補充と関連して」『歴史学報』第112号、歴史学会、1986年
- 黄鎬徳：『近代ネイションとその表象』ソミョン出版、2005
- 黄鎬徳：「朝鮮儒者が見た1884年の東京、朴戴陽の場合—徳化と謳化、表象の近代をめぐって」『比較文学比較文化論集』第22号、東京大学比較文学比較文化研究会、2005
- 黄鎬徳：「国家と言語、近代ネイションとその表象様式ら」ハンギヒョン編『近代語・近代媒体・近代文学』成均館大学校出版部、2006
- ポールヴィリリオ（Paul Virilio）：『速度と政治』イジェウオン訳、グリーンビー、120頁
- バルタ・ベンヤミン：『アケードプロジェクト』チョヒョンジュン訳、新たな流れ、2005
- エドワードサイデンステッカー：『東京の話』ホホ訳、イサン、1997
- 湯本豪一：『日本近代の風景』チョンソンテほか訳、グリーンビー、2004

<日本語と西洋語文献>

- 老川慶喜：『鉄道』東京堂出版、1996.
- 佐藤健二：『近代日本の風景意識』『景観を再考する』青弓社、2004.
- 佐藤健二：『風景の生産・風景の解放』講談社、1994.
- 松浦毒輝：『エッフェル塔試論』筑摩書房、1995
- Augustin Berque：オギュスタン・ベルク、『日本の風景、西欧の風景』、篠田勝英 訳、講談社現代新書、1990
- Baroness Albert d'Anethan：『Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan』、エルアノーラ・メアリー・ダヌタン、『バルギー公使夫人の明治日記』、長岡祥三 訳、中央公論社、1992
- Michael Foucault：『Les Mots et Les Choses』、Gallimard、1966、ミシェル・フーコー、『言葉と物』、渡辺一民・佐々木明 訳、新潮社、1974
- Jean-Luc Nancy：『A Finite Thinking』、tran. Jeffrey Libbrett, edit by Simon

Sparks, Stanford Univ. Press, 2003, p. 225

Edward Seidensticker : *Low City, High City: Tokyo from Edo to the Earthquake*, Knopf, 1983

Susanne Seymour “Historical Geographies of Landscape”, Brian Graham and Catherine Nash eds., *Modern Historical Geographies*, Pearson Education Limited, 2000